海女研究会　平成 29 年 4 月例会　資料

平成 29 年 4 月 24 日

前田憲司

私の周りにある海女～芸能と祭り～

【映画】　～潮騒～

毎日新聞

「三重映画ものがたり」　映画『潮騒』のロケ地を訪ねて

「歌島は人口千四百、周囲一里に充たない小島である。」
三島由紀夫の「潮騒」に描かれる歌島のモデルは伊勢湾口に浮かぶ神島。青山京子・吉永小百合・小野里みどり・山口百恵・堀ちえみをヒロインに、過去に５度映画化され、いずれも神島でロケが行われた。
今年は、第１作から数えて５０年目。伊勢・志摩フィルムコミッションが中心になって、第６作の製作を働きかけているとも聞く。定期船に揺られて４５分。潮騒の島「神島」を訪ねた。

神島の港に着き、歩きだすと、各戸の表札に記された苗字の種類が限られていることに気づく。小久保、寺田、藤原、前田が多い。「潮騒」は、海女・宮田初江と漁師・久保新治の純愛物語。三島が寺田と小久保から、宮田と久保と主人公を名付けたと勘繰るのは、行きすぎだろうかとふと思う。三島は昭和 28 年に二度、神島を訪れ、当時の漁業組合長寺田宗一宅に逗留した。初江のモデルといわれているのが、寺田家に嫁いできたばかりだった寺田こまつさん（71）。小説のラストで、航海中の船が台風に巻きこまれ、新治が荒れ狂う海中に飛び込み繋船するくだりは、こまつさんの亡夫和弥さんの実体験らしいと最近わかったそうだ。

島には近年ハイキングコースが整備され、港から寺田家前、八代神社、灯台、監的哨跡、ニワの浜、古里の浜など、潮騒ゆかりの場所を１時間ほどで歩くことができる。まさにこの地こそ、その時々に輝いていたスターたちが、歩き、カメラアングルに応えた場所だ。

島の人たちは気さくに話しかけてくれる。映画「潮騒」を訊ねて島に来たと言うと、詳しい人がいるよと教えられた。小久保梅三郎さん（90）は、第５作のエンドロールに「現地指導」として名前が登場する方だ。全作に関わってこられたという小久保さん宅を訪ねると、奥さんの時子さん（80）が、資料を出してきてくれた。スナップ写真や俳優・関係者のサイン帖、台本。「吉永小百合や堀ちえみは気さくな感じやったけど、山口百恵はガードが固かったなぁ」と、ロケにまつわる色々なエピソードが次から次に。「島の者にとっては、便利になりましたけど、景色はずいぶん変わりましたな」と梅三郎さん。

八代神社の本殿は鉄筋コンクリート製に建て替え中だった。浜には、消波ブロックが。港は近代的に。浜遊びができなくなった子どもたちのために海岸にはプールもある。奇観を成した老松はほとんど姿を消した。家々は現代的な建物に。切り立った斜面は、マスクメロンのようなコンクリート材で補強されている。…。

鳥羽へ戻る定期船は３時半が最終便。頭の中で６作目のキャストを描きながら、島を後にした。実現したとして、この島でロケが行われるかを心配しながら。

《参考》作品データ

【第1作】1954年	【第2作】1964年	【第3作】1971年	【第4作】1975年	【第5作】1985年
東宝	日活	東宝	東宝　ホリ企画制作	ホリ企画　配給・東宝
監督　谷口千吉	監督　森永健次郎	監督　森谷司郎	監督　西河克己	監督　小谷承靖
宮田初江　青山京子	宮田初江　吉永小百合	宮田初江　小野里みどり	宮田初江　山口百恵	宮田初江　堀ちえみ
久保新治　久保明	久保新治　浜田光夫	久保新治　朝比奈逸人	久保新治　三浦友和	久保新治　鶴見辰吾
宮田照吉　上田吉二郎	久保とみ　清川虹子	宮田照吉　石山健二郎	宮田照吉　中村竹弥	宮田照吉　丹波哲郎
久保とみ　沢村貞子	宮田照吉　石山健二郎	久保とみ　小田切みき	久保とみ　初井言栄	久保とみ　初井言栄

【落語】～祝いのし（あわびのし）～

「祝いのし」という落語があります。家主の息子が結婚すると聞いた長屋のおかみさんが、祝いを持っていけばそのお返しは何倍にもなるだろうと欲を出し、亭主にお金を渡して尾頭つきの魚を買って家主に届けるように言いつけました。亭主は魚屋に行きますが、尾頭つきとなると値が張って買えません。そこで魚屋に勧められたアワビを買って、家主に届けに行きました。今なら、アワビのほうが高いのでしょうが、当時は養殖もなければ、冷蔵技術もなかったでしょうから、貝ならば生きたままでの保存がしやすかったのかもしれません。

やっとのことでお祝いの口上を述べてアワビを家主に渡しますと、他の祝い事ならともかく「磯のアワビの片想い」という言葉があるので、婚礼にアワビを持ってくるとはけしからんと家主は気分を損ねて受け取りません。女房の策略が水の泡だとがっかりして歩いていると、友達に声をかけられます。事情を聞いた友達は、家主のところへもう一度アワビを持って行って、できるだけ汚い言葉でこう言えとこの男に知恵をつけました。

「今度おのれとこのド息子にドン嬶もらいさらす。それについて近所、親類から祝いが来るやろ。その祝いには結構な熨斗(のし)が貼ってある。その結構な熨斗を貼ったままもらうか、それともめくって返すかどっちや？と、こう言え。家主は物知りやから『貼ったなりもらいます』と言うに違いない。その言葉を聞いたら遠慮せんと言うたれ。偉そうに言うたけど、この結構な熨斗の根本を知ってるか？

熨斗は、この貝から作るねん。この貝はどこで獲るかといぅと、志州志摩浦で獲るねん。誰が獲るかといぅと海女という女子（おなご）や。海女は絵に描いたら綺麗やが、あれは絵空事や。本当は潮風に吹かれて色の黒い汚い女子や。たとえ色が黒うて汚のうても、汚れのない女子が海へ入って獲んねん。獲った貝を手桶に入れて番してる女子。この女子は汚れてる。女子というのは月に一度の月経日がある。その月経日のことを『手桶番』とは、これから言うたものや。
その貝を大釜で蒸して剥いて、ムシロ敷いたその上に延(の)して、その上にまたムシロを被せ、その上で後家でいかず寡男(やもめ)でいかず、仲のええ夫婦が夜通し交合せなんだら、結構な熨斗が獲れんのじゃ。その結構な熨斗の根本のこのアワビを何で受け取らんのじゃい！と、こない言うたれ」

持つべきものは友達と、この男、また家主の家に出向いて、月に一度の月経日を月給日、志摩浦を芝田裏（大阪の地名）と、シドロモドロになりながらも、やっとのことで言い終えます。そのあと、家主に切り返されてオチがつくのですが、そのあたりのところが現代では通じにくくなったので、盛り上がったところで「おなじみの『祝いのし』というお話でございました」と締めくくります。

言い間違いや頓珍漢なやり取りに思わず笑ってしまって、その内容についてはあまり印象に残らないのですが、よく聞くと、本当かウソかは知りませんが、熨斗のいわれや海女の風習などが描かれていて、とても興味深いものです。

※ おため　：　お返し　　おいど　：　お尻

※ 手桶番
　月経の隠語。畿内の方言。昔禁裏の女達が経期中不浄の故に大奥の勤務を許されず御台所の手桶の番を命ぜられし風習に起因す。「枕草紙花街抄」に「おそろしきもの何心なき娘の初めて手桶番したる、手桶番とは月水の事なり、同火同食の穢の火を避んとの祝詞也」とあり。「手桶番とは何だなとやぼなやつ」。　【隠語辞典（皓星社）】

【祭り】～鯨船の彫刻・刺繍～

四日市市　諏訪神社　鯨船「明神丸」（南納屋町）

能「海女（海士）」

讃岐国志度寺の縁起、藤原氏にまつわる伝説を素材に、ドラマチックに作り上げられた作品。藤原房前の出生譚や、藤原氏の女性が唐の后になったという伝説、海底に奪われた宝物をとりかえす海人の伝承、房前が志度寺に寄進したことなどを題材としている。
わが命を犠牲にしてまで子の栄達を願う母の行動を主筋に、法華経による女人成仏などの宗教性も加味した人気のある能のひとつである。

＜＜あらすじ＞＞
13 歳の房前大臣は母が亡くなった地、讃岐国房前の地におもむく。従者による奈良、津の国、淡路、鳴門の道行きが謡われ、志度の浦に到着。従者がこの地のいわれを聞きたいというと、そこにひとりの海女が登場する。海女は「志度寺の近くに住むけれども、仏道に反する殺生をしている。伊勢や須磨のように風流の心をはぐくむような土地柄でもない。しかし、そんなことをいってもいられない。仕事をしよう」と独白する。

従者が彼女に「海底の藻をとってきてください」と頼むと海女は「空腹でいらっしゃるなら、ここに持っている藻をおあがりください」と応える。従者は「そうではないのだ。海に映る月をご覧になるのに、藻がじゃまになるのだ」という。それを聞いた海女は「昔もそのようなことがあった。海底の珠をとってこいとのことだった」と感慨深かげに言う。その折のことを語ってほしいという従者の頼みに海女は次のように語り始める。

「今の大臣淡海公（藤原不比等）の妹君が唐の妃になられるにあたって、唐の高宗皇帝から興福寺に三つの宝物が贈られました。そのうちのひとつ『面向不背の珠（釈迦の像が必ず正面にみえる不思議な宝珠）』をこの地で竜宮にとられてしまいました。大臣はその珠を奪い返すため身をやつしてこの地に来られ、海人乙女と契りを結ばれました。そのとき生まれたのが房前の大臣です」と。房前はそれを聞き「われこそ房前大臣である。わが母は志度の浦の海女ときかされてここに来たのだ」と名告る。海女はさらに、珠を取り返したときのことを語る。

「もし珠をとってきたら、この子を世継ぎとしてくださるという約束に、海女は命を惜しまず海中に飛び入ったのです」という語りから地謡にあわせての所作になる。

「空はひとつに雲の波、煙の波を凌ぎつつ、海漫々と分け入りて」やっと竜宮につくと、三十丈の宝塔の頂にその珠がまつられていた。まわりには八大竜王や悪魚、鰐がとりまいている。志度の観音菩薩たすけたまえと、剣を手に竜宮に飛び入ると、竜たちはぱっと退いた。その隙に宝珠を盗み取って逃げようとするのを竜が追ってくる。竜宮では死人を忌むということなので、海女は自分の乳の下を掻き切って、珠を押し込め海底に倒れると、近づくものもない。そのとき力をこめて命綱をひけば、海上の人々によって命綱がひきあげられ、海女は海上に浮かび上がった。大臣は傷つき息もたえだえになった海女をみて嘆き悲しむが、海女の「わが乳のあたりを御覧ぜ」との末期の言葉に傷跡をみると面向不背の珠がある。こうして海女は命を落としたが、その子は房前の大臣となったのだ。

こう語った海女は「われこそあなたの母、海人の幽霊です。この手紙を御覧になってわが菩提を弔ってください」と、房前に手紙をわたし朝の海に消えていった。

四日市市　鳥出神社　鯨船「神社丸」（北島組）

鯱（しゃち）
想像上の、魚に似た海獣。頭は虎に似て背に鋭いとげがあり、尾は空に向かって反り返る。

鰲魚（ごうぎょ）
鰲は大亀（すっぽん）の意。水中に住む魚が天に上る龍になる途中の姿とされる想像上の海獣。
また、龍が生んだ 14 の子どものうちの一つとも言われる。

鳳凰（ほうおう）
古代中国で、麟・亀・竜とともに四瑞として尊ばれた想像上の霊鳥。
体は、前は麟後ろは鹿、頸は蛇、尾は魚、背は亀、あごは燕、くちばしは鶏に似るといわれる。

鷁（げき）
中国で、想像上の水鳥。白い大形の鳥で、風によく耐えて大空を飛ぶといわれ、船首にその形を置いて飾りとした。